

広報部向け文章術

伝わる×マジカル つるまるメソッド

文章は書く前が 8割

迷わず書けるライティングのコツ

記者歴26年、Webニュースメディア
元編集長の経験より、文章術をお伝えします。

こんな状況にあてはまったことはありますか？

- すらすら書けずに時間がかかる
- 書き直しを何度も命じられて終わらない
- 何を書いて良いのかわからない
- 読みにくいと言われる

紙とペンが、パソコン画面とキーボードに変わっても
企業活動において、文章を書くことは今も日常的な
作業でしょう。

社内の報告書、情宣誌、日報、メール、また社外的に
はSNSやオウンドメディア記事、プレスリリースなど。
いかに効率的に伝わる文章を書けるかは、大切な
スキルの一つです。

は、新聞記者時代、数々の現場取材して、日々原稿
を書いていました。

新聞記事には「締め切り時間」がつきものです。



たとえば、スポーツの取材では試合終了直後に80行
(約1000文字)の原稿を仕上げ速報性のある記者発表
では、話を聞きながら原稿を書いて出す、といったこ
とが日常でした。

作家や脚本家のような名作を執筆してきたわけではあ
りませんが、素早く正確に伝える文章を書き続けてき
ました。

もちろん、最初からそんなスラスラと書けたわけでは
ありません。新人記者時代は、迷う時間的な余裕すら
もなく、まったく書けずにトイレで泣いていたことも
多々ありました。

そんな私が、なぜ書けるようになったのでしょうか？
それは「書く前」の段取りの大切さに気付いたからで
す。多くの新聞記者は、書く前にすでに頭の中で「組
み立て」ができています。

伝わる文章を書く秘けつを学び、「書くことが苦手」
から脱出しましょう。

広報部の情宣紙制作に限らず「文章力」向上のセミナーも承ります。

2022年、累計受講者100万人の学びのプラットフォーム「ストアカ」で3万4342講座中全国人気ランキング1位を獲得

いのうちちはる

井上 千椿

文章ワークスアカデミー主宰

元新聞記者&編集長。約8,000現場に足を運び、著名人やアスリートなどを取材。
5万記事の執筆編集に携わる。業界歴30年の経験から、迷わず書ける文章術「伝わる
×マジカル つるまるメソッド」を伝える。記事企画や校正校閲、プレスリリー
ス作成や企業のオウンドメディア記事編集などライティングにまつわる万事をサポ
ート。文藝春秋社「Number」より取材(2022年6月30日号)



企画



講師のブランディングとマーケティングをサポートする

Prokoushi.com

✉ info@prokoushi.com